

基礎基本の徹底が時流の今だからこそ、「メディア創造力」を養いたい

今年で5年目を迎える、「D-project（デジタル表現研究会）」参加者もプロジェクトも毎年順調に増えてきたが、今年度から大きな改革を行うことが決定された。キーワードは、「メディア創造力の育成」。基礎基本の徹底だけに目が行きがちな今だからこそ、子どもたちが自分の頭で考え、工夫し、発想し、創り上げる力を鍛えたいと、中川会長は語る。そのねらいと今後の展開は、何なのだろうか。



D-project会長
中川一史
金沢大学教育実践総合
センター助教授

基礎基本の徹底だけに 力を入れると失敗する

「今の教育界は、基礎基本の徹底一辺倒に傾きつつあります。OECDのPISA学力調査の解釈の誤解も、その一因でしょう。学力低下の危機が叫ばれ、猫も杓子も『基礎基本の徹底』の大切さを声高に唱えているのが現状です」
この現状を、中川会長は憂慮する。

『基礎基本の徹底』の根底にあるのは、日本の教育界に根強い『キチンと文化』。たとえばプレゼン発表なら、『準備した』原稿を、『大きな声でキチンと』読めたかを評価する。発表の内容や工夫は、二の次。基礎基本をキチンと守れたかが、最重要視される。その

結果、友だちの発表を聞いた子どもの感想も『声が大きくて良かったと思います』に終始してしまう。このやり方では、基礎基本の徹底はできて、それ以上の広がりが無い。自分がキチンとできたかのみを見て、情報を発信する『相手』を意識していないからです

「メディア創造力」という 造語に込められた意図

そこで中川会長は、「メディア創造力」という言葉を新たに生み出し、基礎基本の徹底一辺倒の時流に一石を投じようとしている。この言葉には、どんな意味が込められているのだろうか。「メディア表現学習を通して、自分なりの発想や創造性、柔軟な思考をしながら自己を見つめ、切り拓いていく力、と定義しています」

慎重に吟味してこの言葉を考えたとき、中川会長は笑う。

『表現』という言葉を送り込まなかったのには、理由があります。表現はプロセスのひとつにしか過ぎません。情報を集め、構成し、ブラッシュアップして、表現する。さらに、リアクションを受けて再構成する。表現に至るまでの全てのプロセスこそが大切なのです。その意図を伝えたくて、『表現』という文言を外しました」

「創造」という単語を入れたのも、中

川会長なりのねらいがある。「自分なりの創意工夫をこらし、個性を発揮して作品を創造することの大切さと難しさを念頭に置いてほしくて、この単語を盛り込みました」

最近巷でよく目にする、「メディアリテラシー」とはどう違うのだろうか。「世に溢れる多くの情報を、批判的な視点で分析して取捨選択し、有効活用するのがメディアリテラシー。しかし、実際には情報の受信に主眼が置かれて

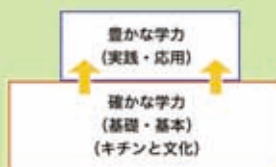
おり、いかに情報を発信するかについてはあまり触れていません。情報の受信だけでなく発信も、『メディア創造力』という言葉の範疇に含まれています」

中川会長は「学力の2層構造」図を披露してくれた。

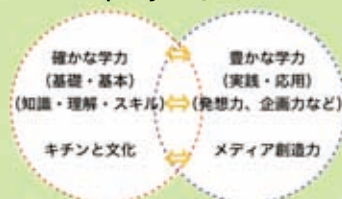
「この図を見ていただければわかるように、『基礎基本』と『メディア創造力』は並び立つもの。どちらかが正しくてどちらかが間違っているという、

学力の2層構造

— 従来型 —



— D-project提案型 —



二者択一ではありません。いわばクルマの両輪のように、お互いが機能し合っただけで、学びは深まるのです」

中川助会長は、トリノ五輪で話題になったフィギュアスケートを例に出して解説してくれた。

「基本的な要素がきちんとしてできているかを問うショートプログラムは、『基礎基本』。基本を踏まえた上で、自分の個性や独創性を発揮して自分らしさを表現するフリープログラムは、『メディア創造力』に該当します」

しかし、現在の学校現場では「メディア創造力」は「基礎基本」の「おま

け」的な扱いを受けていると、中川会長は嘆く。たとえば、国語の授業で壁新聞を作っても、基礎基本である文章構造や字のていねいさがちゃんと身についたかを測る物差しとして評価する授業がほとんど。読み手の目をひくか、相手に伝わったかは不問、もしくは深く追究されないことが多い。

「土台として基礎基本が大切なのは、言うまでもありません。しかし、メディア創造力は『おまけ』じゃない。壁新聞作りを通してしか身につかない基礎基本もあります。そして、今の子どもたちに不足しているのは『この学習が

何の役に立つか』という学習の意味づけや、実感。この不足が学習意欲低下の大きな原因です」

それを防ぐには、学んだ基礎基本を生かす機会を設定することが大切。壁新聞作りやプレゼンテーションといったメディア創造力育成の授業が、その絶好の場面になるのだ。

「これまでに学んだ基礎基本が、社会や生活でどう活用できるかを実感できるとともに、今の自分に欠けている基礎基本は何かにも気づける。メディア創造力の実践授業は、基礎基本の向上にもつながるのです」

メディア創造力育成に特化した 新生D-projectの全貌

一昔前の詰め込み型教育は子どもから創造性を奪い、その反省から生まれた「ゆとり教育」は基礎基本をないがしろにするような誤解を与えた。極端すぎる教育政策は、成功しないのだ。そして今、中川会長はメディア創造力を育成する手段として、D-projectを大きく変貌させようとしている。

「今までのD-projectにも、メディア創造力が身につく実践はたくさんありました。たとえば、『ホンモノパンフレット制作プロジェクト』はその典型例です」

協賛企業であるアドビ システムズ(株)の社員が、「このパンフレットでは読み手に伝わらない」「手に取ってもらえない」と企業人としての視点からダメ出し・支援することで、子どもたちは大いに鍛えられた。

「しかしこの活動は、アドビの方が協力してくれたからこそ可能でした。全ての学校に、企業の社員を派遣するのは不可能。教師や子どもたちだけでできるメディア創造力育成授業を、新生

D-projectでは提供したいと考えています」

たとえば、「絵看板コンテスト」。パソコンルームを表現する絵看板を作り、子どもの投票で1位を決定して、優勝作品を校内の看板として採用する活動だ。これなら企業人がいなくともお互いにシビアな評価を下せるし、「みんな頑張ったね」とよくありがちなために終わることもない。自分にどんな力が欠けているのか、どんな力を持っているかを自覚できるのだ。新生D-project(中川会長はD-project 2と呼称する)では、こういった活動を「厳選して」提供していくという。

「今までのD-projectにはいろいろな実践が集まっており、あえて選別もしていませんでした。しかし、これほど大所帯になると『D-project=ITさえ使えばどんな活動でもOK』という誤解も生まれてきた。そこで全てを一旦リセットし、各教科でメディア創造力が身につく実践に的を絞ります。そして、こ

の実践ではこんな力を身につけるのがねらいだと『意味づけ』をしっかり行い、方向がぶれないように注意したいと思います」

D-projectという器は変えず、中身を研ぎ澄ませるのだと、中川会長は語る。「基礎基本の徹底だけではだめなんだ、こうやればメディア創造力が身につく、基礎基本にもいい影響が出るという事例を、どんどん見せていきたい。D-projectを通して基礎基本が伸びたかを調査し、年度末に発表することも考えています」

この連載企画でも、生まれ変わったD-projectの活動をレポートし、身についた力を浮き彫りにしていく。次号では、新生D-projectのコアメンバーである佐藤幸江先生(横浜市立大口台小学校)、前田康裕先生(熊本市立飽田東小学校)、そして中川会長の三者鼎談をお送りする予定だ。乞うご期待。